福音メッセージ　　安息日論争

マルコの福音書　2 章 23～3 章 6 節　【新改訳改訂第3版】

2:23 ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を通って行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた。
2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。
「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」
2:25 イエスは彼らに言われた。「ダビデとその連れの者たちが、食物がなくてひもじかったとき、
ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。
2:26 アビヤタルが大祭司のころ、ダビデは神の家に入って、祭司以外の者が食べてはならない
供えのパンを、自分も食べ、またともにいた者たちにも与えたではありませんか。」
2:27 また言われた。「安息日は人間のために設けられたのです。
人間が安息日のために造られたのではありません。
2:28 人の子は安息日にも主です。」
3:1 イエスはまた会堂に入られた。そこに片手のなえた人がいた。
3:2 彼らは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。
3:3 イエスは手のなえたその人に「立って真ん中に出なさい」と言われた。
3:4 それから彼らに、「安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。
いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか」と言われた。彼らは黙っていた。
3:5 イエスは怒って彼らを見回し、その心のかたくなのを嘆きながら、その人に、
「手を伸ばしなさい」と言われた。彼は手を伸ばした。するとその手が元どおりになった。
3:6 そこでパリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちといっしょになって、
イエスをどのようにして葬り去ろうかと相談を始めた。

安息日論争　（マルコの福音書2:23～3:6）

2016年6月5日

Ⅰ　安息日の厳しい規定の背景

(1) 二回の亡国

① アッシリア捕囚 (722 B.C.)

② バビロン捕囚(586B.C.)

(2) その原因

① 偶像礼拝

② 律法を破ったこと

特に安息年（7年に一回は休耕する）を守らなかった。

490年÷7＝70年　・・・・バビロン捕囚の期間

(3) 捕囚後のユダヤ人

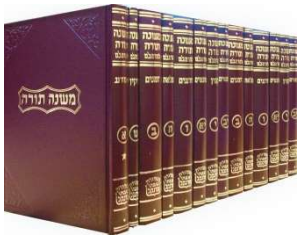
パリサイ派（←ファリシーム　「分離する者たち」）

トーラー（律法）を破ることのないために、　ミシュナー（口伝律法）を守ろうとした。

🚫 ひもを結ぶ、鏡を見る、安息日に鶏が生んだ卵を食べる、写真を撮る、電子機器を使う、

(4) 弟子たちがしたこと：穂を摘む＝収穫＋脱穀＝仕事＝安息日破り（！？）

(5) イエスがしたこと：手の萎えた人を癒やす＝医療行為＝仕事＝安息日破り（！？）



Ⅱ　本当の安息日とは

(1) 安息日は人の益のために定められた

① ダビデと供の者たちが「聖なるパン」を食べたことを非難する者はいない

② 弟子たちが安息日に麦の穂を揉んで食べたことは問題にならない

(2) 究極的な質問

① 安息日に善を行うべきか、悪を行うべきか

⇒善を行えるのに行わないのは悪を行うこと！

② 安息日にいのちを救うべきか、殺すべきか

⇒いのちが救えるのにそうしないのは殺すこと！

(3) 暴露された内面

① イエスを殺す計画を立て始める！⇦　自分たちの面子が丸つぶれになった

② パリサイ派（ローマ帝国を忌み嫌う）であるのに、ヘロデ党（ローマ帝国に媚びへつらう）と結託する

(4) イエスご自身が安息日の主

> そして、彼らに言われた。「人の子は、安息日の主です。」（ルカ 6:5）

① 安息日を定めたのは YHWH（ヤハウェ）＝イエス

② **安息日は自発的に、喜んで主と交わり、主に仕える日**

安息日と日曜日：「教会には最低何回行かなければなりませんか」「フィアンセと何時間一緒にいなければなりませんか」

イエスご自身の中に安らうことが安息

> すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ 11:28～30）

黒崎幸吉　「註解新約聖書」より

註解: キリストは我らと共に同じくびきを負うことを望み給う。彼は柔和と卑（ひく）き心をもて事実上我らの重荷を御自身に負い給い、我らに対して我らの耐え得るだけの力を尽くさんことを命じ給うのである。我ら自らの罪の重荷を負う間は、我らは到底これに耐え得ないことが明かであって、唯絶望より外にない。然るにキリスト我らの代りに我らの罪を荷い給う時、我らの心に始めて休息が与えられる。唯我らはキリストと相並びて同じくびきを負い、キリストの為し給うままにこれに学ぶ事をもって足るのである。これが信者の生活の本体である。

辞解

[くびき] パレスチナに用いらるるくびきは十字形を為し、その下に二頭の牛馬を相並べて繋ぎ、共にこのくびきを負わしめるのである（Ⅱコリ 6:14）。この場合に極めて適切なる比喩である。而してキリストの力が強いために我らは唯彼に学ぶのみであって、力を用いる必要は少ないこととなるのである。唯我らの全力を尽くしさえするならば、キリストはその足らざる処をすべて補い給う、これにまされる心の休息はない。